

手紙からみたモレ時代のシスレー（その2）

二 瓶 恵

1 はじめに

19世紀後半にフランスで誕生した「印象派」は、絵画界に新しい潮流をつくった重要な存在である。19世紀は、産業革命を背景に人々の生活が急速に近代化していった時代である。絵画においても、写真機の発明や持ち運びができるチューブ式の絵の具の誕生により、画家たちは従来のしきたりから解放された。もはや暗いアトリエに籠って絵を描く必要はなく、身軽になってキャンパスと共に戸外へ制作に出られるようになったのである。その喜びを——つまり眼前に広がる美しい景色——降り注ぐ陽の光や木々を揺らす風、流れゆく雲や水面の煌めき、そういった目に映る刻々と変わりゆく自然の姿をキャンパスに素早いタッチで描きだそうとしたのである。透き通るような明るい色彩と共に。印象派の代表的な画家として、ピエール＝オーギュスト・ルノワールやクロード・モネの名は誰もが知るものであろう。イギリス人の両親の元に⁽¹⁾フランスで生まれたアルフレッド・シスレーも印象派の代表的な画家としてその名が挙げられる。しかし、彼の人生は知られていないことも多い。生涯に渡ってフランスでその人生を送ったシスレーであるが、穏やかな気質を持ち派手な人付き合いもなかったためか、その人生はあまり表舞台で語られることはない。

本稿では、シスレーが遺した手紙から彼の画家としての姿——殊に晩年の姿を浮かび上がらせることを目的とする。裕福な貿易商の父を持ち恵まれた環境で青年時代までを送ったシスレーであるが、1870年に起こった普仏戦争により当時暮らしていたパリ西郊セヌ川沿いに位置するブージヴァルの家と家財一切を失う。追い打ちをかけるように、翌年には経済的に支えてくれていた父親も破産する。以後、シスレーは亡くなるまで窮乏した生活を余儀なくされる。ルーヴシエンヌやマルリー・ル・ロワといったパリ西郊で幾度か引っ越しを繰り返した後、1880年代になるとパリ南東に位置するフォンテーヌブローの森の近くに居を構える。その昔王室の狩猟地であった豊かな自然が残る地である。セヌ川の支流であるロワン河沿いにシスレーは拠点を置き、ヴヌー・ナドンやレ・サブロンといった川沿いの小さな村に暮らした。1889年には、終の棲家となるすぐ傍のモレ＝シュル＝ロワンに移り住む。風光明媚なこの地で、シスレーはその美しい村のようすを一貫してキャンパスに描き続けた。1899年に咽頭癌により59歳でその生涯を閉じるまで、10年間シスレーはロワン河流域のこの小さな村で絵を描き続けた。そして、最低限の生活をつないでいくために絵を売りにだしていかなければならなかった。作品は簡単に売れるわけもなく、画商のポール・デュラン＝リュエル——印象派を支え続けた重要な人物——が定期的に作品を買い取ってくれるという形でなんとかシスレーは生活を繋ぎ留めていた。デュラン＝リュエルとの手紙の遣り取りには、当時のシスレーの逼迫した生活の様子が読み取れる。

前稿では、シスレーが晩年を過ごしたモレ時代の前半——つまり1878年から1885年の間——に彼が書き送った手紙を対象とし分析をおこなった。本稿ではそれ以降、つまり1886年からシスレーが亡くなる1899年までの手紙を元に考察していく。これにより、画家の晩年の姿を時代背景とともに浮かび上がらせ、彼の芸術性を理解する一助となるであろう。分析の対象となる手紙は、前稿と同様1939年にリオネロ・ヴェントゥーリが編集した資料（書誌参照）が底本となっている。

2 1886年

印象派グループにとって、この年は大きな転機となる。これまで続けてきた「印象派展」がこの年で最後を迎えることになったのだ。印象派展とは、それまで絶対的な影響力を有していた官展——国とアカデミーによって運営される展覧会——に反抗しつくられたものであった。芸術家たちが世に出て行くために突破しなければならない唯一無二の場であったが、伝統を重んじるばかりに官展は時代にそぐわない保守的なものになっていた。落選が続き不満を感じていた若き画家たち——のちに印象派と呼ばれるようになる彼らが自らの手で立ち上げた展覧会が「印象派展」であった。ナダールの写真館を展示場とし、「画家、彫刻家、版画家などの美術家による共同出資会社第1回展」を開催したのが1874年のことであった。この展覧会がのちに「第一回印象派展」と呼ばれることになる。それ以降12年間、初回の1874年から、76年、77年、79年、80年、81年、82年と続き、この年1886年の5月15日を最後についに幕を下ろすことになったのだ。第8回印象派展は、パリのラフィット通りで開催された。数年前から考え方の違いにより対立していたドガと他の画家たちの亀裂は修復不可能なところまできており、サロンへの出品を一切認めないドガと生活のために可能な限りあらゆる場所に出品を望むルノワールをはじめとした画家たちとの考え方は相いれず、再び交わることはなかった。更に、印象派の画家たちを支えてきた画商デュラン＝リュエルもヨーロッパを襲った大恐慌の煽りを受けて数年前から破産寸前の窮地に追い込まれていた。そして、印象派の一時代に終わりを告げるように更に新しい風——のちに新印象派と呼ばれるようになるスーラとシニャックが頭角を現し始めるのである。こうして、第8回印象派展には、対立を深めたドガ、ルノワール、モネといった主力メンバーが不参加を表明し、第1回から第3回、第7回と参加していたシスレーも作品を出展しないまま最後を迎えることになった。シスレーは、前回の第7回印象派展にはデュラン＝リュエルを通じて27点の作品を出品していたが、1870年代後半から80年代初めは印象派に対して批判的意見も多く、絵が売れることも殆どなかった苦難の時期であった。ドガはこの時のようすを画家のブラックモンに次のように語っている。「15日が初日です。何もかも大慌てで準備しています！我々がサロンにはいかなる作品も送らないという条件を決めているのはご存知でしょう。あなたはこの条件を守っていませんが、あなたの奥様はどうなのですか？モネ、ルノワール、カイユボット、シスレーはこの呼びかけに答えてくれません。費用は私があたりをつけて捻出しましたが、その経緯は複雑なのでここでは説明できません。もし入場料では費用を賄えないのなら、われわれは帽子を回して出品者たちに寄付を請うことになるでしょう。」⁽²⁾。最終的に、この第8回印象派展には全体としては246点の作品が出品された。

画家たちが第8回印象派展の準備に追われている頃、画商デュラン＝リュエルはアメリカに持っていく作品収集に追われていた。彼は、かねてより印象派の画家たちの絵を定期的買い取り経済的に支えてくれた印象派の恩人的存在である。デュラン＝リュエルは、実業家であり美術収集家であるジェームズ・F・サットンの招きにより、この最後の印象派展のおよそ2ヶ月前の3月にアメリカに赴いている。4月10日から5月25日までのおよそ1カ月半にわたって、ニューヨークの5番街20番地にあるムーア・アメリカン・アート・ギャラリーにて「パリ印象派の油彩画とパステル画展」が開催された。デュラン＝リュエルのアメリカにおける初展覧会であり、300点にのぼる絵画が出品された大規模な印象派展であった。カタログには、デュレによる序文とイギリスとフランスの各新聞の好意的な批評からの記事が抜粋して載せられた⁽³⁾。次いで6月には、ナショナル・アカデミー・オブ・デザインにて展覧会が開催された。モネの作品が48点、ピサロ42点、ルノワール38点、ドガ23点、マネ17点、シスレー15点、スーラ3点、他にカイユボット、メアリー・カサット、ベルト・モリゾの作品が展示された。大きな評価はされなかったものの、アメリカでは比較的好意的に受け入れられたようであった。リヴォルトによれば、「画家たちが、明確な意図をもって描いていることはたしかに感じられるし、彼らが既存の規則を無視しているのは、そこから脱却しようとしているためである。ちょっとした真実を無視しているとしても、それより大きな真実をもっと力強く、詳しく語るためである」（1886, 11, april, *The Critic*）。「ニューヨークで、これほど興味深い展覧会をかつて見たことがない」（*ibid.*）。「モネ、シスレー、ピサロの風景画は、天国のような穏やかさと完璧なまでの美しさに満ちている」（1886, April, *Art Age*）⁽⁴⁾。といった評価を得た。ルノワールの息子であるジャン・ルノワールも自著『わが父ルノワール』のなかで父の言葉を次のように残している。「父は、デュラン＝リュエルの〔1886年の〕ニューヨーク旅行についてよく話してくれた。この町で彼らの作品の展覧会が行われたことが、印象主義者たちの生活の重要な転機となった。「われわれが飢え死にせずに済んだのは、おそらくアメリカ人のおかげだよ」。「たぶんアメリカの大衆もフランスの大衆と同様に利口なわけじゃないんだ。ただ彼らは、自分たちに理解出来ないことは馬鹿にすべきだとは思わないのさ」（『わが父ルノワール』, p.242）。デンバーもこの年について次のように回顧している。「関税上の問題にもかかわらず⁽⁵⁾、ニューヨークでの印象派展は強行され、8回目にして最後ともなるパリでの印象派展の1ヶ月前に始まった。悲惨なことに、画家たちの間にひどく辛辣な雰囲気が生じてしまったが、その原因は少なからずスーラとシニャックという「新印象派」の加入にあった」。

時間が逆行するが、この年の2月8日、デュラン＝リュエルを通じてモネとルノワールとルドンがブリュッセルの前衛派美術グループ20人会^{レヴァン}が開催する展覧会にそれぞれ8点を送っている。ドガは出品を求められたもののこれを拒んでいる。同じ日に、デュラン＝リュエルはシスレーの近作、《サン・マメス、運河に沿って》を買い入れている。デュラン＝リュエルは、このように定期的に印象派の画家から絵を買い取ってくれた恩人であるが、シスレーの絵をなかなか売ることができずこの絵が彼がシスレーから購入した最後の1枚となる。これ以後、シスレーは経済的にますます窮乏していく。副業として扇に絵を描こうとするがこれも断念に終わっている。ヴェントゥーリ版のデュラン＝リュエル宛て

の以下の手紙（8月2日付）は納品書に関するものであった。

デュラン＝リュエル宛て13通目、1886年8月2日付け、レ・サブロンにて
デュラン＝リュエル様

あなたがお戻りになったこと、トワグロ氏からの手紙で先程知りました。ですから、あなたが発たれる前にわたしの納品書をあなたへ見せてくれるように彼に言ったのです。この件に関してお返事を一言頂けましたら幸いです。

もし制作にこのように忙殺されていなかったなら、パリに行っていたでしょうに、ここ2週間はそれも無理そうです。

あなたの今回の旅が、実り多いよいものであったことを願っております。

敬具

A.シスレー

この年の12月から翌年1887年1月までデュラン＝リュエルのギャラリーで展覧会が開催され、シスレーの作品が8点展示された。デュラン＝リュエル自身が前年の夏に選んだ新しい作品により構成された展覧会である。この展覧会を最後に、印象派の画家たちはそれぞれの道を進んでいくこととなる。

3 1887年

前年度の第8回印象派展が最後の展覧会となったことが物語るように、この頃から印象派と呼ばれた画家たちがそれぞれ自分の道を歩み出す。最年長者であり印象派の指導者的立場にいたピサロは点描画を生み出したスーラやシニャックと交友を深めるようになり、点描画よりの画風へと傾倒していく。1883年にベルギーで発足した前衛派美術グループ「^{レヴァン}20人会」の展覧会がブリュッセルで2月に開催されたときには、スーラやルドンらと共に作品を出品している。ゴッホは、同じく2月にカフェ・タンブランで日本版画展を開いている。4月になると、ゴーギャンが原風景を求めてマルティニク島へと船で旅立っている。それぞれが、印象派の枠を超えて各人の画風を追求していった過渡期といえよう。

この時期のシスレーについて、F・ドールトの『シスレー』によれば、次のように記されている。「1887年から死に至る晩年期のシスレーは、その作風をより確固としたものに見せるため、手法を少しずつ拡げていった。だがその結果、力強さは得たものの、優美さ、清涼さが彼からは失われてしまった。(…)画家は、以前のしなやかさで、より率直なメティエを失っていることに気づかざるをえない。樹木の魂は、けばけばしい緑で表わされる。木々の葉は死んでいるように見える。かつての木の葉は、一つ一つの異なっていたはずの、点のような小さい筆触で描かれていたことを考えると、意外の感をまぬがれない。家の厚塗りは、形態の不明確さを補ってはいない。水もその透明度を失っている。こうした点があまりにも眼につきすぎるのである」⁽⁶⁾。しかし同時に、これに反論するクロード・ロジェ＝マルクスの弁も掲載されている。「モレヤサン＝マメスやヴヌー＝ナドンで描かれた連作にさえ、かつての天使のような音色がいたところに蘇っている。シスレーが優しげに「タブローの愛された一角」と名付けたものを強調するならば、彼が、河の流れ

や運河に沿ったポプラ並木に光を震えさせているのも、同じ優しさによってなのである。たとえ筆遣いがおぼつかなくみえるときでも、心は誠実さで溢れている」⁽⁷⁾。また、シスレーはシャン・ド・マルスのサロンに定期的に出品していたが、リオゥルトによると「同時代の画家でもっとも好きな画家は誰かと尋ねられたシスレーが挙げた画家は、ドラクロワ、コロー、ミレー、ルソー、クールベだけであり、現存する画家は誰一人、かつての仲間すら挙げていない」⁽⁸⁾。この時期、シスレーは一種の迷いの時期に入っていたといえる。

そのような中、5月8日にジュルジュ・プティの画廊で第2回国際絵画彫刻展が開かれる。モネ、ピサロ、ルノワール、シスレー、ベルト・モリゾといった画家たちが出品した。また、ホイッスラー、ラファエリといった印象派とは異なる画家たちも参加した。批評家の評価は多少高まり、展覧会は成功に終わった。シスレーの作品に関しては、評価は幾分よくなっていたものの、彼の才能を生前に認めていた批評家はリヴィエール、アレクシス、デュレ、タヴェルニエ、ジュフロワ、アレタサンドルなどの少数者に限られていた。アレクシスは10月に発表した論文「ミュレル・コレクションの印象派画家たち」のなかで、28点のシスレーの作品を称賛している。モネはこの時のことをデュラン＝リュエルにこう書き送っている。「プティの展覧会における成功が反響を呼んで、ブッソ・エ・ヴァラドン商会が、ルノワール、ドガ、シスレーと並んで自分の作品を購入し、これらを簡単に売却したようです」。5月25日には、ニューヨークで2回目となるデュラン＝リュエルの展覧会が開かれた。アメリカ美術協会が支援してくれ、国立デザイン・アカデミーで開催された。この展覧会には、モネ、ピサロ、ルノワール、シスレーらの作品が展示され、並んでドラクロワ、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの作品も置かれた。10月には、テオ・ヴァン・ゴッホ、ブッソ・エ・ヴァラドン画廊がシスレーを何点か購入する。

この年に暮れに書かれたシスレーの手紙は、オクターヴ・モース^{レヴァン}に宛てたものである。モースは、ベルギーの実業家で「20人会」を発足させた人物である。

〔オクターヴ・モース宛1通目、1887年12月1日付〕

拝啓

あなたやあなたのご友人が表明なさっている非常にリベラルな考え方、芸術に関する考え方を疑う気持ちはありません。しかし、今年はあなたのご親切なご招待を受ける状態にわたしはありません。

敬具

A.シスレー

4 1888年

この頃になると、シスレーは自身が暮らすモレの美しくのどかな町並み——教会や小路、橋や森、そしてロワン河畔からの眺めを繰り返し描くようになる。ドールトも著書の中でこう記している。「城門や望楼や小径、それに家々の保護屋根に聳え立つ教会の鐘楼などのあるモレの町そのものが、シスレーの気に入りのモチーフの一つとなった。画家は、あるときは、この小さな町の幸福を、ロワン河畔のひっそりとした、佇まいとして表す」⁽⁹⁾。

この年の1月、デュラン＝リュエルはニューヨークの5番街に画廊を構える。アメリカでは、印象派の画家たちは偏見なく受け入れられており、フランスの絵画界のようにアカデミズムとの軋轢もなかった。それは、海を渡ったイギリスでも同じであった。アメリカからパリに戻ったデュラン＝リュエルは、5月に画廊でグループ展を開催する。5月15日から6月25日にかけて開かれたこの展覧会には、ピサロの絵画が26点、ルノワールとシスレーがそれぞれ24点展示された⁽¹⁰⁾。その内、シスレーの1点が政府買い上げとなる。《9月の朝》は1,000フランで買い上げとなり、のちにアジャン美術館に所蔵される。デュラン＝リュエル宛ての手紙は、展覧会のための作品リストを記したものである。

〔デュラン＝リュエル宛て14通目、1888年5月17日付〕

デュラン＝リュエル様

わたしの個展（1）のための作品リストをお送りします。もう1作品《3月の雪》は明日またお持ちいたします。

敬具

A.シスレー

（1）展覧会は、1888年5月25日から6月25日まで開催され、シスレーの24作品と他にルノワールとピサロの作品数点が展示された。

《ロワン河増水時のモレ橋》

《モレとボルト・ドゥ・ブルゴーニュ》

《アカシアの木陰（8月の朝）》

《森の周り（6月）》

《水路（10月）》

《ブルゴーニュからモレの水門（4月の午後）》

《修復中の船（サン＝マメスにて）》

《廃屋》

《白霜》

《森の朝（6月）（オヴリー氏所蔵）》

《泉への道（6月の朝）（ガリマル氏所蔵）》

《9月の朝（国家所有）》

続く8枚のパステル画

《モレ駅（雪と霜）》

《 〃 （日向の雪）》

《 〃 （霜）》

《 〃 （雪解け）》

《 〃 （冬の太陽）》

《 〃 （3月の雪）》

《モレとニケーズの小さな丘々》

《窓から見える森の外れ》

この展覧会には、デュラン＝リュエルはモネにも参加を求めていたが、断られていた。モネはフランスでも印象派は受け入れ始めていると主張しアメリカに画廊を開いたデュラン＝リュエルに快い感情を抱いていなかった。現に、1882年11月に既に、モネはシスレーと共にデュラン＝リュエルのもとを訪れ、「全員参加の展覧会よりも、個展を時をおいて開催の方が皆にとって有益だ」と主張していた⁽¹¹⁾。こうして、モネはデュラン＝リュエルから離れ、ブッソ・エ・ヴァラドン商会のためにテオ・ファン・ゴッホと契約を交わす。この年の2月にはゴッホがパリを離れ、理想郷を夢見て南仏アルルへと居を移す。10月末にゴーギャンが合流するものの、病と貧困に喘いでいたゴーギャンの目的はゴッホの弟であり画商のテオからの仕送りであり、二人の共同生活は初めから上手くいくはずのない運命であった。そして、クリスマス前夜にあの有名な耳切り事件を引き起こすのである。12月になると、パリのゴドー＝ド＝モロワ通り12番地のジョルジュ・プティ画廊でシスレーの個展を開催された。

1888年は、20人会^{レヴァン}の活動がますます活発になる時期でもある。トゥルーズ＝ロートレックも彼らの展覧会に参加した。ドガはこの年の招待を断り、セザンヌは「自分の試みの成果が、理論的に立証できると自分自身で感じられるようになるまで、静かに制作すると決意した」とオクターヴ・モース宛の手紙にしたためているが、シスレーやゴッホが出展すると知らされ、「このようにすばらしい仲間たちと一緒に展示できる光栄を思えば、わたしの決意も変えることもいといません」と書いている⁽¹²⁾。

5 1889年

この年になると、印象派の枠を超えてさまざまな画家または芸術家同志の組み合わせによる展覧会が催されるようになる。1月にはデュラン＝リュエルが新しく組織した画家版画家協会の展覧会が開催され、ブラックモン、ピサロ、ルドンらがこれに参加する。2月初めには、前衛派美術グループ「20人会」^{レヴァン}の展覧会がブリュッセルで開催され、セザンヌ、ゴーギャン、モネ、ピサロ、シニャックらの作品が展示された。2月27日から3月15日にかけては、ニューヨークのデュラン＝リュエルのギャラリーにおいて、シスレーの最初の個展が開催された。1872年から1888年にシスレーが描いた28点の作品が展示された。4月には、ロンドンのグービル画廊が「クロード・モネの20の印象」展を開催。6月になると、パリ万国博覧会にともない、「フランス美術百年展」が開催された。セザンヌ、マネ、モネ、ピサロらが出品する。また、ジョルジュ・プティ画廊ではロダンとモネの2人展も開かれ、好評に終わる。批評家のオクターヴ・モースは、「かつてこれほどの激しさと真実をもって自然が表現されたことはなかった」と「ラール・モデルヌ」誌で語っている。10月には、コペンハーゲンのフランス美術協会が「スカンディナヴィアとフランス印象派」展を開催。セザンヌ、ドガ、ギヨマン、ピサロ、メアリー・カサットとともにシスレーの作品も出展された。

しかし展覧会が続く中でも、シスレーの生活は苦しいままであった。やむなくド・ペリオ博士宛に手紙を書き、彼の甥に作品を売りたいと伝えた程シスレーの生活は窮乏していた。11月になると、シスレーは家族とともにレ・サブロンから再びモレ＝シュル＝ロワンへと戻る。初めは教会があるレグリーズ通りに居を構え、その後1894年からはシャトー通

りとモンマルトル通りの角にある庭のある質素な別荘に移った。この家がシスレーの終の棲家となる。

実はこの年、オクターヴ・モースからブリュッセルの^{レヴァン}20人会の展覧会への参加を持ちかけられていたのだが、行き違いが重なり選ばれた5点の絵は送ることができなかった。その時にモースへ送った手紙は以下の通りである。

〔オクターヴ・モースへの手紙2通目、1889年11月20日付、モレにて〕

拝啓

あなた様の親切なご招待に心から感謝いたします。今後5作品を出品するつもりでおりますが、よい作品をお送りしたいので、これから選別します。数日後に作品概要をお送りいたします。

敬具

A.シスレー

6 1890年

この年の2月に、先に述べた^{レヴァン}20人会の展覧会が開催される。セザンヌ、ゴーギャン、モネ、ピサロ、シニャックらの作品が展示された。^{レヴァン}20人会はベルギーのブリュッセルで1883年に発足したもので、「規則に従わない芸術家たち」⁽¹³⁾を名乗って集結したグループである。進歩的芸術家のために毎年展覧会を開催し、そして成功を収めていた。美術批評家のオクターヴ・モースはこの事務局としての役割を担っていた。モースは、1886年の「近代芸術」誌のなかで、「これからの展覧会をあらゆる形態の近代芸術の実現の場にすること」と述べている。まさに、印象派を生み出した画家たちと考えが合致していた。

同じく2月に、^{ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール}国民美術協会が設立される。1880年の改革以来サロンの運営に携わってきたフランス芸術家協会からの分離である⁽¹⁴⁾。アルフレッド・ロールの推薦により、シスレーもこの新設の協会の会員となる。これ以降、シスレーは毎年5月にシャン＝ド＝マルスのサロンで開催される国民美術協会の展覧会に7～8点の作品を出品し、それを亡くなるまで続けた⁽¹⁵⁾。シスレーにとってこのサロンに出品できることは、ひじょうに喜ばしいことであった。すぐさま、シスレーは自身を推薦してくれた画家のアルフレッド・ロールに礼状を書き送った。

〔アルフレッド・ロール宛て 1890年2月付〕

親愛なるロール様

私が国民協会展に準会員として招かれたのは、あなたの果敢な御尽力の賜物だと、友人のアルセヌ・アレクサンドル氏が手紙で知らせてくれました。私の絵を見てもらうにはどうしたらいいのか、これは毎年私がひじょうに頭を悩ませる問題の1つでした。そして、たいていは失敗に終わっていました。それゆえ、私があなたに捧げる感謝がどれほどの誠意のこもったものであるか、ご理解いただけたと思います。

3月26日から、パリのデュラン＝リュエルの画廊で第二回画家版画家協会展が開催された。ピサロが油絵を展示し、シスレーも2点の油絵と銅版画^{エッチング}1点を出品する。この展覧会に際してシスレーが書き送った手紙が以下のものである。

〔デュラン＝リュエルへの手紙15通目、1890年2月2日付、モレにて〕

デュラン＝リュエル様

「画家版画家協会展」に関してわたくしを当にさせていただいて結構です（1）。出品する予定の作品について、近日中に再度お手紙を差し上げます。

敬具

A.シスレー

（1）第二回「画家版画家協会展」のことを指す。シスレーは油絵2点とエッチングを1点出品している。

その後、5月15日から30日まではシャン＝ド＝マルスのサロンで国民美術協会展が開かれ、シスレーは初めてこれに参加する。出品した6点の風景画のうち4点は収集家の所有であったが⁽¹⁶⁾、概ね好評のうちに終わった。

この年は、マネの《オランピア》が国に寄贈されることが決まるなど、大きな動きがあった。印象派の仲間と決別していたドガも、遅ればせながらこの《オランピア》のための募金に同意の意を表明している。4月にはルノワールがアリーヌ・シャリゴと結婚、7月にはゴッホがピストル自殺により亡くなる。

この年に、シスレーがオクターヴ・モースへ送った手紙が以下の2通である。行き違いが生じ、シスレーは20人会の展覧会に参加することができなかったのだが、その時に書き送ったものである。

〔オクターヴ・モースへの手紙3通目、1890年1月付、モレにて〕

拝啓

あなた様のサロンに是非とも出品したいと存じます。病でベッドに伏せっているため、ジョルジュ・プティ氏へ手紙を2度書き送っております。そこで、彼があなたへお送りすると同意した作品のリストにより確実さを与えるように示しています。こちらは、彼がわたしに宛てて送ってきた最後の手紙です。6作品——わたしが知ってさえもない——のうち2作品しかお送りすることに同意できません。これが、わたくしが荷造り係に何も発送しないように書き記した理由です。

あなたのところで展示されることを願っておりますが、あなたがリストをお持ちの作品をジョルジュ・プティ氏から取得できるなら大歓迎であります。しかし、いかなる作品でも彼があなたへ送ることは望みません。

敬具

A.シスレー

〔オクターヴ・モースへの手紙4通目, 1890年1月23日付, モレにて〕

拝啓

ジョルジュ・プティ氏はなぜわたしと一緒に選んだ作品——そのリストはあなたもお持ちです——を急に貸し出すのを拒否したのでしょうか。わたしには皆目理由が分かりません。あなたがわたしに送ってくださった手紙で述べられている主張に関してですが、それは彼の嘘と卑劣さによるものです。わたしはブリュッセルでわたしの作品が展示されることを強く望んでいます。あなたの次の展覧会を待ちながら、もしどこか他の画商のところで作品を展示できるなら大変嬉しく思います。

今回起こったことに関してはひじょうに残念に思っております。あなたに対しても殊にわたし自身に対しても。

敬具

A.シスレー

7 1891年

この年、シスレーは画商デュラン＝リュエルとの契約を断ち、競合相手であったジョルジュ・プティと専属契約を結ぶ。以後、プティがシスレーの作品を扱う唯一の画商となる。

3月5日、国民美術協会展がシャン・ド・マルスのサロンで開催された。シスレーも数点の作品を出品する。また、同じく3月に、デュラン＝リュエルはアメリカのボストンで、モネ、ピサロ、シスレーのグループ展を開催する。ルノワールとモネはある程度の成功を収めたものの、ピサロとシスレーはあまりいい評価は得られずに終わる。この年、モネはデュラン＝リュエルのパリの画廊で《積み藁》の連作15作品を公開し、かつてない程の成功を収めている。続いて、ルーアン大聖堂の30点もの連作の製作も開始した。ドールトは、「モネ＝光のなかでのフォルムの溶解、シスレー＝均衡と調和のフォルムの解明」と分析している。12月1日には、アレクサンダー・レイドの「ソシエテ・デ・ボザール」がロンドンで展覧会を開く⁽¹⁷⁾。ドガ、モネ、ピサロ、シスレーらの作品が展示された。12月3日には、ジョルジュ・プティ画廊でシスレーの個展が開かれた。

この年に、シスレーがデュラン＝リュエルに送った手紙は以下の通り。

〔デュラン＝リュエルへの手紙16通目, 1891年8月18日付, モレにて〕

デュラン＝リュエル様

思いがけない形で、ミュンヘンの展覧会にわたくしの作品が一点出品されていることを知りました。お送りになったのはあなた様でしょうか？

敬具

A.シスレー

8 1892年

4月16日に国民美術協会展が開催される。出品したシスレーの作品を作家のオクター

ヴ・ミルボーが批判する。彼は、「ル・フィガロ」誌に国民美術協会展についての批評を掲載。シスレーはその批評のなかで自分へ向けられた評価に腹を立て、公開書簡でこれに抗議する。

9 1993年

3月1日から4月1日に、ジョワイヤンがブッソー・エ・ヴァラドンの画廊でシスレーの個展を開催する。この展覧会は、好評のうちに終わる。タヴェルニエが『フランス芸術』誌に長大なシスレー論を掲載し、19世紀風景画家の巨匠の一人として絶賛する。シスレーは友人でもあったタヴェルニエに、手紙で雄弁に語っている⁽¹⁸⁾。「空のシスレー」と呼ばれる画家の心持がよく伝わってくる手紙である。

アドルフ・タヴェルニエへの手紙

必要なのは、対象をそれ固有の肌合いで表すこと、とりわけ自然のままに光を包むことなのだ。これさえ上達すればいい。

肝心なのは、空の使い方である。空は単に背景にとどまるものではない。それどころか、空はその面（空にも大地と同様に幾層もの面があるのだ）によって、奥行きをもたすだけでなく、その形態によって、タブローの構図上の効果と関連したその配置によって、動きを与えることもできる。

夏によく生ずるものほど、すばらしく、変化に満ちたものがあるだろうか。僕が言いたいのは、美しい白雲が漂うあの空のことだ。何という動き、何というスピードだろう。そうは思わないか。海にいるとき、それは高まっては引いていく波の効果を生む。

それよりもゆっくりとした、もう一つの空、それが暮方の空だ。夕空の雲は長く伸び、中天に固定されたかのように航跡や渦の形を描き、やがてそれも沈みゆく夕日に吸い込まれながら、その姿を消していく。この優しげでメランコリックな空には、去りゆくもののもつ魅力がある。僕はこうした空がとりわけ好きなのだ。けれども、画家にとって大切な空のすべてを君に語るつもりはなく、ここでは、そのなかでもとくに僕が気に入っているものだけを話しているのだ」

シスレーは、この夏頃からモレ＝シュル＝ロワンの教会をモチーフに描き始める。異なる時間帯の光の下、何作も描き始める。1893年から翌94年の間に、連作で12点もの絵を描いている。

10 1894年

この年は、なんといってもカイユボットの死去が大きな出来事として記される。画家としても活躍したが、彼は裕福な名家の出身であり経済的に印象派の画家たちを支えた大黒柱でもあったことを特筆せねばならない。印象派展の開催にあたってはその会場費などを負担し、また経済的に苦しむ仲間たちの絵を買い取り生活を支えてやったのだ。そして、遺言で「自身のコレクションを国に寄贈する」と言い残していた⁽¹⁹⁾。印象派の膨大なコレ

クションが国に遺贈されることになり、これによって印象派の地位が不動のものになったと云われている。2月21日に46歳という若さでこの世を去ったカイユボットは、ピサロ、モネ、ルノワール、シスレー、ドガ、セザンヌ、マネといった印象派画家の作品68点を国に寄贈すると言いつつ残していた。当時はまだ印象派の地位は今ほど確立されておらず、ジェロームら官学派がこれに異論を唱えていた。政府も買い取りを渋っていたが、協議の結果、最終的に38点を受け入れた。現在、このカイユボットのコレクションはオルセー美術館の中核を為している。国が買い取ったシスレーの作品は9点中6点であった。

2月15日、オクターヴ・モースが率いる「自由美学」の第一回展が開かれた。自由美学は、前年に20人会^{レヴァン}から改組されたものである。展覧会には、ベルト・モリゾ、カミーユとリュシアン、ジョルジュのピサロ親子、シスレーらが出品した。3月18日には、批評家のテオドール・デュレが所有していたかなりの数の印象派絵画がオテル・ドルーオで競売に掛けられる。160,000フランという落札総額を記録した⁽²⁰⁾。4月から5月にかけて開催された第5回国民美術協会には、シスレーは《モレの教会》の連作など8点を出品。夏には、ノルマンディーを訪れる。晩年のシスレーはモレを離れることは減多になかったが、この夏は知人のミュレルが経営するルーアンのオテル・デュ・ドーファンと一部所有のオテル・デスパーニュに滞在する。次いで、実業家で美術愛好家でもあるフランソワ・ドゥポールの邸宅に招かれそこに滞在する。ドゥポーはシスレーの支援者であり、晩年のもっとも熱心なパトロンでもあった。シスレーは少なくともこの滞中で7枚の絵を仕上げている。モレ＝シュル＝ロワンに戻った後は、レグリーズ街からモンマルトル街19番地に最後の転居をする。⁽²¹⁾

11 1895年

この年も、またひとり印象派の仲間がいなくなる。女流画家ベルト・モリゾが一人娘のジュリーを看病中に肺炎に罹り54歳で死去したのだ。娘のジュリー・マネへの遺言の中で、自身の作品をドガ、モネ、ルノワールらに遺贈すると書き遺していた。シスレーも、この頃、病気の兆候が現れだし、後に咽頭癌と診断される。そのため制作は捗らず、経済的にも逼迫する。シスレーは引き籠って生活するようになり、表舞台に姿を現さなくなる。冬には雪の中で長時間描き続けたことが原因でリューマチを患い、一時的に顔面神経痛にも苦しんだ。リオゥルトは著書の中でこう記している。「長い不安定な窮乏生活は、仲間の誰よりも彼に大きな影を落とした。疑念を抱くようになった彼は、かつての仲間とさえもはや会わなかった。(…)彼と親しかった人の証言によると、それよりも重大だったのは、しばしば妄想に苦しめられるようになっていたことである。「彼は怒りっぽく、不機嫌で、不安定だった。悲痛でかわいそうなほど、むさぼるように、他人から寄せられる興味や思いやりの気持ちをすべて受け入れた。だが、すぐにも疑念でいっぱいになり、新しい友情を避け始めるのである。それで彼らはさらにますます不幸になり、自ら人生を耐え難くしてしまった。彼の人生からだんだん喜びがなくなっていき、描くことだけが彼に残された唯一の楽しみだった。それは決して彼を見捨てることがなかったからだ」。⁽²²⁾

ピサロは、息子のリュシアンに宛てた手紙でシスレーについてこう言及している。「彼らは手元に金がないという。これは単に比較的そうだというにすぎない。モネは売れてい

る。ルノワールやドガも売れている。わたしはシスレーと同じ船に乗ったまま、印象派のしんがりを務めているのだ」⁽²³⁾。

4月25日と26日の両日、アメリカ美術協会が画商でコレクターのジェームス・F・サットンの代理で、ドガ、ギヨマン、モネ、ピサロ、ルノワール、シスレーらの作品の売り立てを行う。9月には、ベルギーで開催されたгент・トリエンナーレにモネ、ピサロ、シスレーが参加し、作品を展示する。

12 1896年

印象派の仲間たちの意志により、デュラン＝リュエル画廊で前年に亡くなったベルト・モリゾの回顧展を開催する。5月2日には、ミュレルがルーアンの自邸でギヨマン、モネ、ピサロ、ルノワール、シスレーらの作品展を開催する。12月には、ジョルジュ・プティから翌年2月に大回顧展をしないかとの申し入れがあり、シスレーは直ちに準備に取り掛かった。

13 1897年

2月1日、ジョルジュ・プティの画廊で、宝石商であったドレ・ヴェヴェールのコレクションが競売に掛けられ、モネ、ドガ、ピサロ、シスレーの作品なども売りに出された。シスレーの作品は2,500フランで落札された。モネの作品が21,000フランで落札されたことと比べれば⁽²⁴⁾、雲泥の差があることは否めないが。この4日後の2月5日から28日まで、再びジョルジュ・プティの画廊でシスレーの個展が開かれた。油絵146枚、パステル画5点⁽²⁵⁾が展示された。しかし、評判はあまりよくなく、新聞に取り上げられることもなかった。高額で絵が売れることもなく⁽²⁶⁾、個展はこじんまりと終わった。シスレーにとって、これは大きな傷痕となる。しかし、5月12日、ピエール・オーブリーのコレクションが競売にかけられ、そこでシスレーの作品に高値が付く。オーブリーのコレクションは主に画商テオ・ヴァン・ゴッホから購入した印象派の作品であったが、1887年に150フランで購入されたシスレーの作品がこの年には2,350フランで売れたのだ。デンマークの画家ヨハン・ローデも次のように述べている。「カミーユ・ピサロ、ギヨマン、セザンヌ、シスレー……のすてきな作品もあった。シスレーはちょうど、公式に芸術家の一人として受け入れられようとしていた」⁽²⁷⁾。少しずつではあるが、シスレーは画家としてその作品価値が認められ始めていた。

その後、シスレーはフランソワ・ドゥボーの招待でイギリスを訪れている。体調を崩してからシスレーがモレを離れることは殆どなかったが、この年の夏、南イングランドと南ウェールズに滞在している。ルーアンの実業家で美術愛好家でもあったドボーがシスレーの絵を前払いで買い上げてくれ⁽²⁸⁾、4ヶ月分のイギリス滞在の費用を支払ってくれたのである。彼のお蔭でシスレーは旅費を賄うことができ、母国の地をもう1度訪れたいという願いが叶ったのである。人生で初めて全額を前払いし、7月3日にイギリスへ赴いた。最初にコーンウォールのファルマウスを訪れ、ついで海辺の街カーディフのすぐ南にあってプリストル海峡を見下ろすペナースに居を定め、その後ラングランド湾に移った。彼が海を描いたのはこれが最初の間である。最初にファルマスに滞在し、その後海辺の街カー

ディフ、ペナース、ロングランド・ベイなどに滞在、精力的に風景画に取り組んだ。7月16日には批評家のギュスターヴ・ジェフロワに次のように手紙を書き送っている。「田園は美しいです。そして、大きな船が入ってきたり、カーディフの外へ出て行ったりするロウズ（船が錨を下ろして停泊してられる場所）はすばらしいです…」⁽²⁹⁾。8月には30年近く一緒に暮らしているマリー＝アデレード＝ウジェニー・レクーゼと結婚式を挙げる。シスレーがこの時イギリス滞在で描いた《カーディフ・ロウズ》には2人の人影が描きこまれており、これは妻と娘の姿である。こうして、シスレーは4ヶ月という長い期間をイギリスとウェールズで過ごし、25枚の作品を携えて10月1日に再びモレ＝シュル＝ロワンへと戻った。そして、シスレーにとってこれがイギリスへの最後の旅となった。

この時の様子を、シスレーは手紙にしたためている。

〔オクターヴ・モースへの手紙5通目、1897年12月3日付、モレにて〕

拝啓

あなたからの招待はひじょうに魅力的なのですが、わたくしは今はジョルジュ・プティ氏並びに国民美術協会（ソシエテ・ナショナル・デ・ビザール）でしか展覧会を行わないことにしました。非常に遺憾ですが。

敬具

A.シスレー

14 1898年

この年、シスレーは10年前の1888年に次いで2回目となるフランスへの帰化申請をする。前年秋にイギリスからモレに戻ったシスレーは、フランスへの帰化を再び真剣に考えていたのである。しかし、複雑な手続きの何から始めたらいいのか分からず途方に暮れ、友人のタヴェルニエに手紙を次のように送っている。

〔アドルフ・タヴェルニエへの手紙、1898年1月28日付〕

親愛なる友、しばらく前から頭を悩ませている問題のことで、ぜひ君に会いたいと思っていた。フランスへ帰化したいのだ。ところが、このところ神経痛がとてもひどく、手続きをとるために気候が少し暖くなるのを待っている。くだくだ言わずに、君に頼みたいことを言おう。つまり、こうした問題に関して国璽尚書へどのように書いたらいいのか、まるでわからないのだ。そこで、この下書きを送るから、もし不十分だったり、誤記があったなら、改めるなり、書き加えるなり、訂正するなりしてもらえるとありがたいのだが。

シスレーのフランス国籍申請に関して、モレ＝シュル＝ロワン警察当局が出した報告書には以下のように記されていた⁽³⁰⁾、「彼の行動、道徳性および高潔さは非常に健全である。彼は物静かで平和を愛し、誰を訪ねるでもなく、非常に引き籠って暮らしている。彼の思想が国家の安全に対し脅威を与えるものとは思われない」。しかしながら、度重なる引ッ

越してシスレーは書類をいくつか紛失しており、また訳書の煩雑な手続きと悪化する健康のせいで帰化の手続きは断念せざるを得なかった。ドールトによれば、「行政上の問題から生じた障害を前にしたシスレーには、帰化のために面倒な手続きにとりかかる気力は残されていなかった。容赦ない病が身体をしだいに蝕んでいくのを感じていたからである。癌であった。おまけに彼は、世の無関心のただなかで何とか自分の作品を評価させようといつも闘い、むなしくもがくことに疲れ果てていた」。さらに、10月8日には妻のウージェニーが死去するという悲しみがシスレーを襲う。シスレーの言葉がフリーレンダーの著書にこう残されている。「彼女は不治の病に見舞われた。シスレーは見事なほどの献身ぶりを発揮し、細々と世話をやき、彼女が休むソファの後ろで昼間を過ごすのだった。「金がどんどんなくなる！」。彼女は舌癌で凄まじい痛みの中で死んだのだ」⁽³¹⁾。自身と同じ癌であり、壮絶な苦しみを伴う舌癌であった。悲しみと孤独の中、シスレー自身の病状も悪化。10月28日は大量の吐血をしたとある。その後、小康状態になった時に友人でもあり美術収集家でもあり主治医のヴィオーに手紙を送っている。

〔ヴィオー医師への手紙、11月28日付〕

この前の吐血が信じられぬぐらい元気になりました。滑稽なほど痩せはしましたが、体力は幾分回復しました。酸塩ソーダによる局部治療を続けています。『ポンズ・エクストラクト』による、うがい、洗浄、噴霧と、コロニ化粧水での脚と背中との摩擦です。こんな簡単なことが、これほどまでに効果的だとは思ってもみませんでした。親愛なる友よ、私はできる限り頑張っているのです。

しかし、この1か月後の12月31日に再びヴィオーに手紙を書いている。首は腫れ上がり、呼吸をすることも動かすこともできない状態であった。「100フランから200フランで済む」医者を紹介してくれるように依頼する手紙には胸が締めつけられる。

〔ヴィオー医師への手紙、12月31日付〕

もはやこれまでです。親愛なる友よ、もう力が尽き果てました。寝かせもらおうにも椅子に座っているのがやっとなのです。首、食道、喉、それに耳のあたりの腺が膨れているので、頭を動かすこともできず、もはやこれ以上もたないのではと思っています。それでも、あなたが信頼を寄せている医者で、100から200フラン以上の料金をとらない人を御存知でしたら、私はその人に診てもらいます。その人が来る日時をお教えてください。そうしたら、駅に車を差し向けます。心を込めて、そしてとても悲しい気持ちで握手を送ります。

5月1日、シスレーは国民美術協会展に5枚の油彩画を出品する。どれも前年にイギリスへ滞在した時に描いたものである。5月14日、デュラン＝リュエルがモネ、ピサロ、ルノワール、シスレーらの作品展を開く。

15 1899年

病状がおもわしくないシスレーは、前日の12月31日に主治医であり友人であり美術集収集家であったヴィオー医師に手紙を送っていた。

〔ヴィオー医師への手紙、1月1日付〕

昨日の手紙はどうか忘れてください。“ふさぎの虫”にとりつかれて、弱気になっていたのです。もう過ぎたことです。愚か者のエゴイズムが前にもまして身に沁みしました。元旦の前日だというのにあのような手紙を書いてしまって。どうかお許してください。今一度親愛のしるしを。

ヴィオー医師は医師マリーとともにシスレーの元に駆けつける。

〔ヴィオー医師への手紙、1月13日付〕

苦痛と、もはや闘う気力もない衰弱の苦しみで、私は疲れ果てました。

1月29日午前1時、シスレーは咽頭癌による苦しい闘病の末についに亡くなる。最後まで貧困と孤独にあえぎながら息を引き取った。

死期が近いことを悟ったシスレーは、亡くなる直前の1月21日に、遺していく子どもたちのことを頼むためにモネに急いで来てほしいと連絡を取っている。モネは次のような手紙を遺している。

〔ギュスターヴ・ジェフロワ宛モネの手紙、1月21日付〕

シスレーの症状が極端に悪いそうです。彼は真に偉大な芸術家です。かつて存在したどんな巨匠にも匹敵するほど偉大だと思います。彼の作品のいくつかを再度見ましたが、そこには希な視野の広大さと美しさがあります。特に洪水の絵は傑作です。

友人ピサロは、シスレーの死を知らされた後、息子のリュシアンにこう手紙で語っている。

1月22日

シスレーは危篤だそうだ。何はともあれ、もっとも偉大なる大家の一人であると思う。稀有な豊かさや美しさをもつ彼の作品を何点かまた見たが、とりわけ《洪水》は傑作だ。

シスレーが亡くなった後は、モネがジョルジュ・プティの画廊でシスレーの遺作展ができるよう取り図い、115,640フランという高額な売り上げを遺された子どもたちのためにあげた。シスレーの衣服と家具も競売に掛けられ、それぞれ50フランと950フランで落札された。デュラン＝リュエルもシスレーのために、彼の作品3点を含む20点の印象派の作

品をドレスデンのエルネスト&グートピエ画廊に送る。1月30日には、ドレスデンでドガ、モネ、ピサロ、ルノワール、シスレーらの展覧会を開催された。

2月1日、シスレーはモレの墓地に埋葬された。モネ、ルノワール、カザン、タヴェルニエらが会葬する。友人であったアドルフ・タヴェルニエは葬儀でこう述べている。「シスレーは、光の魔術師、空と水と木の詩人、すなわち我々の時代の最も傑出した風景画家のひとりです」。2月9日、ベルネム＝ジュヌ画廊がシスレーの作品14点（1897年制作）を展示する。2月27日、デュラン＝リュエルがニューヨークの画廊で「アルフレッド・シスレー展」を開催。3月まで、1872年～88年までに制作されたシスレーの作品28点を展示した。同じく2月に、ベルナン・ジュヌ画廊で、1897年に制作した14点の作品展が開かれた。4月30日には、ジョルジュ・プティ画廊で「シスレーのアトリエからの油彩、パステル、習作および他の芸術家たちが彼の子どもたちに寄贈した作品の展覧会」が行われた。27枚の絵が競売にかけられた。翌年1900年3月6日には、タヴェルニエがおこなった競売で、生前シスレーが180フランで売った《ポール＝マルリの洪水》が43,000フランで落札された。イザーク・ド・カモンド伯爵によって落札されたこの作品は、現在はルーヴル美術館に所蔵されている。

16 おわりに

シスレーは、孤独と貧困の中、その晩年を過ごした画家である。才能に恵まれていたにもかかわらず、彼が世間に認められたのは亡くなった直後からであった。なんと哀しいことであろうか。シスレーが描き出す、その穏やかでやさしい風景画からは、彼の人生の苦悩はつぶさには見えてこない。彼の最後の手紙が治療費が殆どかからない医師を求めたものであり、亡くなる直前までその逼迫した経済状況に苦しんでいた。

キャンバスの大半を空でうめるように描いたシスレーは、その重要性を手紙の中でも語っている。つねに明るい空がシスレーの絵を包み込んでいる。

〔アドルフ・タヴェルニエへの手紙〕

主題、モチーフは鑑賞者にとって単純で理解しやすく、そして心を捉えるように表現されなければならない。このことは、画家が自分に指し示す道に従い、まず自分を深く感動させたものを見て、無駄な細部を省くことによってもたらされる。それがカラーとヨンキントの魅力である。主題の次に重要なのは、風景画の最も興味深い特徴のひとつ、すなわち動き、生命である。それは実現が最も難しいもののひとつである。芸術作品に声明を与えることは、もちろん画家という名に値する者には不可欠な条件である。フォルム、色彩、表現様式といったすべてが、このことに関わっている。声明を与えるのが画家の感動であり、鑑賞者の感動を呼び起すのはこの感動である。⁽³²⁾

多くの美術批評家たちにも同じ思いを抱かせている。ここに幾つか引用する。「ロワン河の川面や水底には、プロヴァンシュ水車小屋や、石のアーチのある橋の姿が映し出されている。またあるときは、十一月の朝、陽が昇って冬景色を息づかせるそのときの、マトラの水車小屋やその仕事を繰り返し描いている。だが、彼の選ぶ視点がなんであれ、水

の流れや水車小屋や木々の緑の上には、ほとんどいつも壮麗な空が描かれているのである。空こそがシスレーが、つねに変わることなく没頭したものであった。彼は一日一年、時々刻々変化するその微細なニュアンスまでを捉えようと努めたのである」⁽³³⁾。「風景には顔と同じようにニュアンスと表情のすばやい変化がある。事物や時間、永遠の物質と太陽の光をキャンパスに再現しようとすることは、すなわち最も大きな芸術上の問題を解決しようとするのである。さまざまな様相と現象を画面に定着させるためには、構成の美的感覚と粗描のテクニクだけでは不十分である。自然への理解と愛、眺め入った光景を語りながら自分の精神を語る才能とともに生れ出るものでなければならない。才能は俄かに目覚めるものではない、偉大なる人物は風景画に限らず稀なものである。こうした人物のひとりがアルフレッド・シスレーである」⁽³⁴⁾。「シスレーの風景描写のなかには、つねに日常的な人間の好意が描かれている。19世紀前半に活躍したイギリスの風景画家ターナーやドイツのロマン派の画家たちが描く荒々しい洪水の表現は、人間のスケールを超えた自然の猛威を見せつける。また、モネのセーヌ川の雪解けの光景も人間の視点を拒絶する。ところがシスレーの《ポール・マルリの洪水》は、洪水というより、春先のセーヌ川が増水したあとの光景である。水はまだ引いていないが、その水は広い空を穏やかに反映している」⁽³⁵⁾。

前稿では、シスレーが経済的に逼迫し画商のデュラン＝リュエルに金銭を用立ててもらう内容が殆どであったが、本稿で扱った手紙は友人やよく知る知人である批評家や画商に対する感謝の手紙、そして病状が悪化してからの意志や友人に対する手紙が殆どであった。シスレーの温厚な人柄が伝わってくるものばかりである。物静かで前面に出るタイプではないシスレーが、多くの人に愛された証がドールトの『シスレー』（ファブリ版）に記されている。それを引用し本稿を締め括りたい。「1911年初頭、モレの市民たちが記念碑を建立すべく拠金運動を開始。7月11日、ブロンズの胸像の除幕式が全市民列席のなか、行われた」。

注

※邦訳のある場合、頁数表記は邦訳文献のそれを示す。

- (1) パリの有産階級の家生まれ。父ウィリアムはフランスで輸出会社を経営、母フェェリシアはロンドンの旧家の出。『シスレー』、レイモン・コニア、pp.15
- (2) The Chronicle of Impressionism, DENVIR, Bernard, pp.151
- (3) ibid. p.149, 153
- (4) Cite par Rewald, p.376.
- (5) DENVIR, pp.149 3月23日、アメリカでの初展覧会の準備のために、デュラン＝リュエルは総額81,799ドルの絵画約300点を入れた43箱をニューヨークの関税にも申告するとある。
- (6) Dault, pp.57-58.
- (7) 「アルフレッド・シスレー展序文」、デュラン＝リュエル画廊、1957年、pp.7-8
- (8) pp.407
- (9) Dault, pp.57
- (10) レイモン・コニアでは17点
- (11) Dault, pp.51
- (12) Rewald, pp.394.セザンヌ「モース宛書簡」、1889年11月27日
- (13) DENVIR, pp.214

- (14) *ibid*, pp.174
- (15) Dault, pp.56
- (16) *ibid*. レオン・クラビソン, ル克蘭シェ, マレー, モンテニャック氏の所有
- (17) オールド・ボンド街39B番地のミスター・コリアーズ・ルームズ
- (18) Dault, pp.58
- (19) 正確にはリュクサンブール美術館
- (20) DENVIR, pp.198
- (21) Dault, pp.62, R・ショーンではモンマルトル19番地への転居は「1892年頃」とされる。
- (22) Rewald, pp.407.
- (23) DENVIR, pp.200, 2月24日付
- (24) DENVIR, pp.210
- (25) ドールトによると6点
- (26) Dault, pp.210, 800フランから1500フランという値上がり幅が広がっていた。
- (27) Rewald, pp.395
- (28) DENVIR, pp.62 仕事でロンドンへ出掛けるようになったドゥボーは、自分と同行するようシスレーを誘い、彼がイギリスの海岸で描くつもりであった風景画を3枚前払いで買ってくれた。
- (29) DENVIR, pp.211
- (30) DENVIR, pp.216
- (31) マックス・フリートレンダー, 『芸術と芸術批評』, pp.98 - 202
- (32) Dault, pp.44
- (33) Dault, pp.57
- (34) Joffroi
- (35) 島田紀夫, 『セーヌで生まれた印象派の名画』, pp.148

Références

- ASSOULINE, Pierre: *Grâces lui soient rendues, Paul Durand-Ruel, le marchand des impressionnistes*, Gallimard, collection 《Folio》, 2002.
- COGNAT, Raymon: *Sisley*, Bonfini Press, Liechtenstein, 1968. (作田清訳『シスレー イール＝ド＝フランスの抒情詩人』, 作品社, 2007年。)
- DAUBERVILLE, Henry: *La bataille de l'impressionnisme*, Bernheim Jeune, 1967. (中山公男訳『印象派の戦い』, 毎日新聞社, 1970年。)
- DENVIR, Bernard: *The Impressionists At First Hand*, Thames and Hudson Ltd., London, 1987. (末永昭和訳, 『素顔の印象派』, 美術出版社, 1991年。)
- DENVIR, Bernard: *The Chronicle of Impressionism : An Intimate Diary of the Lives and World of the Great Artists*, Thames and Hudson Ltd., London, 1993. (池上忠治監訳, 中西博之・松村恵理・隠岐由紀子・速水豊訳『印象派全史 1863ー今日まで』, 日本経済新聞社, 1994年。)
- HOOK, Philip: *The Ultimate Trophy How the Impressionist Painting Conquered the World*, Prestel, 2009. (中山ゆかり訳『印象派はこうして世界を征服した』, 白水社, 2009年。)
- OZANNE, Marie-Angélique, DE JODE Frédérique: *L'Autre Van Gogh — Une biographie de Théo van Gogh*, Editions Olbia, 1999. (伊勢英子, 伊勢京子訳『テオ もう一人のゴッホ』, 平凡社, 2007年。)
- PROUST, Antonin: *Manet*, Bruno Cassirer/Berlin, 2. Auflage, 1929. (野村太郎訳『マネの想い出』, 美術公論社, 1983年。)
- RENOIR, Jean: *Renoir par Jean Renoir*, Librairie Hachette, 1962. (栗津則雄訳『わが父ルノワール』, みすず書房, 1964年。)
- REWALD, John: *The history of impressionism*, Museum of Modern Art; 4th, revised edition, 1980. (三浦篤・坂上桂子訳『印象派の歴史』, 角川学芸出版, 2004年。)
- SHOAN, Richard: *Sisley*, Phaidon Press, London, 1994. (島田紀夫・松島潔訳『シスレー』, 西村書店, 1999年。)
- VENTURI, Lionello: *Les archives de l'impressionnisme : lettres de Renoir, Monet, Pissarro, Sisley et autres: memoires de Paul Durand-Ruel. Documents, I et II*, Burt Franklin, 1968. (1939年刊)

デュラン＝リュエル版の復刻)。
ボオル・ガッシュ編、式場隆三郎訳『印象派画家の手紙』, 耕進社, 昭和10年。『現代世界美術全集20
ピサロ／シスレー／スーラ』, 集英社, 1973年。
島田紀夫『セーヌで生まれた印象派の名画』, 小学館, 2011年。
島田紀夫『セーヌの印象派』, 小学館, 1996年。
島田紀夫『印象派の挑戦 モネ, ルノワール, ドガたちの友情と闘い』, 小学館, 2009年。
『図録シスレー展』, 伊勢丹美術館, 1985年。
『図録シスレー展』, 伊勢丹美術館, 2000年。
ジェルマン・バザン『マネ』, 大島清次訳, ファブリ版世界の美術, 印象派の巨匠たち1, 小学館,
1976年。
フランソワ・ドールト『アルフレッド・シスレー』, 松本芳夫訳, ファブリ版世界の美術, 印象派の巨
匠たち7, 小学館, 1976年。
三浦篤・中村誠監修『印象派とその時代 モネからセザンヌへ』 *Impressionists and their Epoch:
From Monet to Cézanne*, 美術出版社, 2002年。

Sur quelques lettres d'Alfred Sisley à Moret-sur-Loing (suite et fin)

NIHEI Megumi

Alfred Sisley a laissé peu de lettres, ou du moins celles qui nous sont parvenues sont rares, notamment les lettres rédigées pendant les dernières années de sa vie, lorsqu'il vivait aux alentours du Loing et qu'il s'éloignait de ses amis. Dans cet article, nous analysons des lettres qu'il a écrites principalement dans les années 1880 quand il habitait à Moret. Dans le but de mieux comprendre sa valeur artistique, nous comparons ces écrits à des lettres ou des témoignages d'autres peintres, marchands, et critiques d'art."